笑がおの会・吉川市　　第１９号　２０１２年　夏

女と男の情報紙（ひと　ひと）

# 笑がお

## 地域の笑顔

「ここは散歩の終点なのかい」と話しかけられたのが最初だった。
持病の糖尿病のために歩き始めたのは、田畑にかこまれた土地に引越し、仕事を変えたときからだった。
まっすぐな田んぼの中の道は、四季折々に色を変え、野の草が目を楽しませてくれる。
知り合いもいないので、ひとりで歩いていた。

私の母の歳ぐらいかなと思われたおばあさんは、足が少し不自由そうだったが、健康的な明るい顔をして、畑で作物をつくっていた。
新鮮そうな野菜の中で、草をとったり、作物を収穫したり、後から聞けば野菜作りのプロだった。

親しくなるにつれて、おばあさんが漬けているきゅうりのお漬物を頂いたりするようになった。
その味は、天下一品と言えるおいしさで、ご飯を食べ過ぎてしまうほどだった。
その秘訣を聞こうとしたら、「ヒミツ」といわれてしまったが、漬けもの桶にヒミツがあるような気がした。
永年漬け込まれた桶にはきっと乳酸菌がたくさんあって、きゅうりの味を調えてくれるのだろう。
「商売になるよ。売ったら…」という言葉には、関心を示さず、「また、漬けたらやるからな。」と気前がいい。
ねぎも大根もいただくようになって、私の散歩は野菜運びのようになってしまった。

少し忙しくて、しばらく散歩にいかないと「どうしてたん？」と心配してくれるようにもなってきた。
たわいもない話をして、「元気？」と挨拶して、「なんとかな！」といってにっこりしてくれるおばあさんの笑顔は、今や私にとってなくてはならない日常になってきている。

**みんなが笑顔でいられるために……**

**みんなが笑顔になる街づくり・地域づくりを**

**一緒に考えていきませんか？**